

おはようもなく朝

生野来実

白く柔らかい一粒の塊から米の匂いが立つようにゆらめいて霞んでゆく

温かい憧れが軽々と昇る時 一つの答えを示して私を置き去りにした

やるべきことよりも やりたいことのために

レムの谷間をさまよっています、と言えたなら この唇はひび割れていなか
ったか

赤ちゃんの指の間に隠れている酸っぱい味に似た水溜まりが

頬を湿らし、膨らむ綿を撫でつけていた

布の温みは私を花束のように優しく抱いて

ふいにぶつかった壁は冷たいままスコーンになりきっている

時間との勝負をしているような足裏が床を叩く振動に 壁とともに揺らされ

兄と母のファッションチェックする話し声に 緩く閉じている瞼をまた力ま
せられた

兄のためにレンチンで熱せられた豚肉

臭いはアスファルトを歩いた靴底

しかめた全身で頭上の文字盤を睨みつければ

生活を便利にするために生まれたスマホが眉間に向かって滑り落ちてくる

アラームは六年前から切れていた

中木の上で揺れるカーテンの影が薄く 電気代の眩しさに目覚める